豊橋市美術博物館友の会だより

—2013年—冬号 Vol.87

FU風伯HAKU

Winter 2013

展覧会紹介

豊橋市美術博物館収蔵品展
墨のいろ ～モノクロームの世界に遊ぶ～
平成26年1月11日(土)～2月11日(火・祝) 月曜日休館　**豊橋市美術博物館2階展示室**

古来から東洋画の骨格をなし、濃淡や筆法を通じて「墨に五彩あり」といわれてきた墨という素材は、微妙なトーンやにじみ、かすれ、ぼかし、などによって実に多彩で豊かな世界を表現することができます。水墨画は禅宗美術とともに盛隆をみせ、江戸時代に入ると唐絵と大和絵を融合させた狩野派の華麗な墨彩画や、柔和で自由な筆法による文人画(南画)など、多様な拡がりをみせるようになりました。また、近代以降、とりわけ戦後からは色面に重きを置いた日本画が主流となりますが、相対して墨という素材に新たな可能性を見出した表現も多々みられます。

本展では江戸後期の郷土画人の水墨画から、近代性を加味した白井烟嵓(えんがん)の水墨淡彩画をはじめ、白抜きで深山の樹々をあらわした平川敏夫や自由奔放でユーモラスな中村正義の水墨表現、独自の境地を築いた水谷勇夫(いさお)や佐藤多持(たもつ)の墨絵など、それぞれ個性豊かな近現代の日本画をご覧いただき、多彩で奥深いモノクロームの世界をお楽しみいただきたいと思います。

深遠な漆黒の色――このひとつの色に我々が見てきたものは何でしょう？他の色に侵されることのない厳粛な存在であり、全ての事象を包括する墨の色を通して、無限の彩りと表現の可能性を感じ取っていただければ幸いです。

(学芸員　丸地加奈子)

山元春挙《松図》(左隻)

白井烟嵓《雲行雨施》

館長講座

日　時／平成26年１月26日(日) 午後２時～
演　題／「水墨の美～郷土画人を中心に」
講　師／金原宏行（豊橋市美術博物館館長）
会　場／１階講義室（聴講無料）

実技講座

日　時／平成26年２月９日(日) 午後１時30分～
内　容／「白抜き技法で描く墨の風景」
講　師／三木登（日本画家）
会　場／１階講義室
対　象／一般（中学生以上）定員24名
材料費／1,000円
申込み／１月７日より電話受付

ボランティア・ガイド

日時／平成26年１月14日(火)～２月11日(火・祝)
午後２時～／３時～　※1月25, 26日, 2月8, 9日は除く。
(土日祝は午前10時半、11時半にも開催)

「二川宿ゆかりの文人たち－田村幹皋－」展

平成25年11月30日(土)～平成26年1月19日(日)

豊橋市二川宿本陣資料館　休館日：月曜日、12月29日(日)～1月1日(水)

(ただし、12月23日・1月13日は開館し、12月24日・1月14日は休館)

東海道二川宿は、文化面でも吉田宿を中心とする東三河地方や遠州地方との交流が深く、特に幕末から明治中期にかけて風雅の道に携わる文人たちの活躍が目立ちました。その多くは、宿場の有力者で漢詩文・和歌・俳諧・絵画などが盛んに行われていたようです。

中でも田村幹皋(かんこう)は、幕末から明治にかけて書・生花・絵画・煎茶・俳諧など多くの教養を身につけた当時の代表的な文化人でした。特に絵画は、東三河の画壇に大きな影響を与えた田原藩の渡辺小華に学び、その崋椿(かちん)系の画風は正に崋山・椿山・小華の画風を髣髴とさせるものです。

幹皋は、二川宿の名家で商家を営む駒屋8代善蔵憲政の二男として、天保元年（1830）閏３月22日に生まれました。幼名を寿平、通称を善蔵、名を苗政(みつまさ)といい、幹皋と号しました。

幹皋は、画を38歳の慶応３年（1867）９月に田原藩の渡辺小華に入門して学び始めます。小華は、言うまでもなく渡辺崋山の二男で崋椿系南画の系譜を引く当代随一の文人画家・南画家でありました。

小華は、幕末から明治初期にかけて藩老として江戸と国元との間を往復するなど非常に多忙な時期を送っていました。明治７年（1874）豊橋に移住、のち関屋町の百花園に移り、明治15年に上京するまで豊橋に在住し、数多くの弟子を育てています。

豊橋を中心とする東三河で小華の弟子となった者のほとんどがこの百花園時代に入門しているので、幹皋の入門は比較的早い時期であったことがうかがえます。そうしたこともあり師・小華の作品や小華と幹皋の合作が何点か残されているところから、密接な関係があったものと思われます。

現存する幹皋の作品は、それほど多くはありませんが崋椿系の画風を素直に継承したものがほとんどです。これらを見ると、水墨花鳥画の大家といわれた小華の影響が色濃く出ており、師匠の手本どおり忠実に、しかも器用に描いているのが分かります。

本展では、幹皋の画業を中心に、その師である小華と幹皋ゆかりの画家の作品も紹介します。

（館長　後藤清司）

巌谷一六《幹皋》

田村幹皋《花卉図屏風》

夏休み企画・収蔵品展「こわい絵」報告

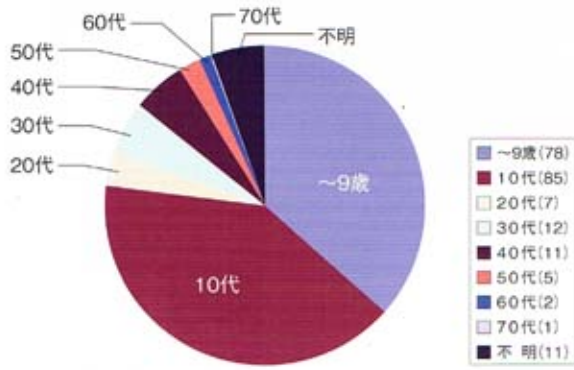
前号でご紹介した夏休み企画「こわい絵」展のご報告を申し上げます。常日頃より「こわい絵ばかり」との声が多いわが館の収蔵作品ですが、それを前面に打ち出しての企画となりました。むしろ「こわい絵」と銘打つことで興味を引いたのか、1万3千人を越えるご入場をいただきました。客層は小さな子どもさんを連れた親子が中心で、普段美術館にはあまり足を運ばない中学生や高校生などティーンエイジ層が自主的に足を運んで来たことが印象的です。人気投票型アンケートの回答者の年齢層は10歳未満および10代が大勢を占め、次がその保護者にあたる30代、40代でした。アンケートをみると「こわい」「好きではない」と常には目を背けてきたような対象に、真正面から向き合う機会となったようです。この展覧会会期中には夏休みということでさまざまなイベントを試みましたので、以下に記します。

（学芸員　丸地加奈子）

「最強のこわい絵」投票結果

1位	中村　正義	何処へいく	32票
2位	中村　正義	うしろの人	29票
3位	星野　眞吾	鏡のある部屋	25票
4位	八島　正明	アパート	16票
5位	田島　征三	ぼくたちの踊る踊り	11票
	星野　眞吾	猫の部屋	11票
	岡田　　微	月明	11票

アンケート回答者



■キッズ鑑賞プログラム「こわい？」探検ツアー

8月7日(水)・11日(日)実施／参加者:61名

あいちアートエデュケーション研究会との共同企画。秘密兵器(鑑賞ツール)を使って、絵画の世界を探検。各回7,8人のエデュケーターがついてグループに分かれて鑑賞したため、2時間という長さに関わらず、最後まで気持ちやことばを引き出すきめ細やかな対応ができた。

■納涼ナイト・ミュージアム

8月9日(金)・16日(金)実施／参加者:61名

懐中電灯を使って夜の美術館を探検するプログラム。バックヤードの探検の後は「こわい絵」展会場で作品鑑賞を行う。懐中電灯で探りだすような鑑賞は、通常よりも集中力が増した。

■夏休みワークショップ「こわい」と遊ぶ

8月14日(水)／講師:山口百子(美術家)／参加者:18名

見えないものはこわい！？という恐れの気持ちを実体験するプログラム。「こわい」気持ちを体験した後は、展覧会を鑑賞。その後、見えないこわさの視覚化を試み、紙粘土などを使って表現した。

■夏休みワークショップ「豊橋妖怪ハンコをつくろう」

8月17日(土)・18日(日)／協力:株式会社うちうら・豊橋民話を語りつぐ会／参加者:36名

豊橋の妖怪民話の朗読を聞いた後、消しゴム板(低学年はスチロール板)に自分だけの妖怪ハンコを作成。さらに、皆で完成した版画をもちよって、妖怪ちょうちんに仕上げた。

■夏の夕べの怪談落語

8月8日(木)・10日(土)／噺家:微笑亭さん太(豊橋落語天狗連)／参加者:111名

「こわい絵」展会場に高座を設け、落語の夕べを開催。演目は「おすわどん」と「牡丹燈籠」。両日とも大入り満員であった。

■鑑賞授業

小中学校に呼びかけ、鑑賞会を実施。5校、延491名の生徒と20名の教員が参加した。

キッズ鑑賞プログラム：鑑賞している作品は投票で最強のこわい絵となった中村正義《何処へいく》

怪談落語：噺家の背後の《うしろの人》と、「牡丹燈籠」の女たちがシンクロするような印象を受けた。

「培広庵コレクション 雪月花～美人画の四季～」展を見て

気になる男の気になる絵 －甲斐荘楠音《うちは》－

藤本逸子（243）

今もそうかも知れないが、昔の先生は、授業中に、その授業内容とは関係のない話をよくしてくれた。ある時、「嫌いは、好きに近い。大嫌いは、好きのすぐ隣りだ」と先生が話してくださった。それは、何の授業で、どの先生がしてくださったのかも忘れてしまったが、このときの「そんなことはないよ。嫌いは、好きの真反対。一番遠いよ」と感じた自分の反応とお話の内容だけは覚えている。そのように感じたのだから、おそらく幼い学年の頃聞いたのであろう。「好き」も「嫌い」も気になって仕方がない、双方とも無関心でいられない状態であるということを、先生はおっしゃりたかったのだと、それからしばらく時を経てから分かるようになった。

「甲斐荘楠音（かいのしょうただおと）」を初めて知ったのは、何かの講演会で、熊沢五六氏が、他の画家の作品とともに紹介と解説をなさった時である。熊沢氏のコレクションの一部をスライドで見せてくださったように記憶している。それ以来、「甲斐荘楠音」は、私の気になる男となった。無関心でいられない。「培広庵コレクション 雪月花～美人画の四季～」展に、「甲斐荘楠音」の作品も展示されると聞いて、胸が高鳴った。早速見に行った。

さすが、培広庵コレクションである。どの作品も美しい。上村松園の絵は、大好きだ。気品がある。襟足の清々しい美しさに、いつも心がときめく。

しかし、「甲斐荘楠音」が気になる。どうしようもなく、気になるのだ。甲斐荘楠音の「うちは」の女性は、何を見ているのか、何を考えているのか。そのしどけない姿とキリリと締まった意思的な口元とのコントラスト、全く異質なものが調和している。いったいこの女性は、何者なのか。この女性をめぐるドラマが、勝手に掻き立てられ、心の中が騒がしくなる。私の心の平和をこれほど乱す作品は他にない。

「すきな絵をさがそう！」を実施

10月19日、20日に開催された豊橋まつりにあわせ、豊橋公園に集まった子どもたちに、豊橋市美術博物館の「培広庵コレクション 雪月花～美人画の四季～」展を見学して好きな作品を選んでもらう催しを実施しました。

あいにくの雨のなか、ご協力いただいた友の会役員の方がたの奮闘もあって、小、中学生ら356人が参加しました。そのうち6割は初めての来館で、子どもたちが美術に親しむよいきっかけになりました。

最も投票を集めた作品は山川秀峰（やまかわしゅうほう）の《安倍野（あべの）》で、屏風の迫力に加え、「キツネがかっこいい」という感想が多くみられました。ほかにも猫やチョウなどが描かれた作品は人気があり、子どもたちは動物や昆虫に愛着を感じているようでした。投票数２位の小西長広（こにしちょうこう）《踊妓（ようぎ）》も屏風で、その大きさと繊細さを評価する一方、「着物姿の女の人がきれい」という感想が多数寄せられました。第３位の梶原緋佐子（かじわらひさこ）《たそがれの庭》からは和の雰囲気が感じ取れて、「こんな庭に座ってみたい」という感想がみられました。

このほか、「この女の人が何を考えているかとか、見る人によって考え方がちがいそうな所がいいから」（中学３年生）といった大人顔負けの意見や、「子どもとお母さんがいっしょに仲良く手をつないでいる。今はあまりみたことのない様子で、りそうの感じだから」（小学６年生）といった少し切ない感想もあり、子どもたちにとって美術と向き合う貴重な体験になったようです。

（学芸員　田中竜也）

作品の投票結果ベスト10

順位	作者名	作品名	投票数
1	山川　秀峰	安倍野	28
2	小西　長広	踊妓	25
3	梶原緋佐子	たそがれの庭	22
4	榎本千花俊	春宵	18
5	紺谷　光俊	更衣	17
5	森川　青坡	雪中二美人の図	17
7	木村　斯光	浅春	14
8	板倉　星光	夏の夕	13
8	梶原緋佐子	蝶	13
8	紺谷　光俊	手鏡	13

秋の研修旅行記

11月6日(水)に伊勢神宮と海の博物館をめぐる日帰り研修旅行を実施し、36名の参加がありました。参加者から届いた旅行記を紹介します。

式年遷宮のすんだお伊勢さんを参拝して

清水淳史(3023)

豊橋市美術博物館で行われた尺八とお琴とピアノのコラボレーションコンサートを聴きに行ったご縁で、この行事に誘われ喜んで参加させていただいた。声をかけた方が皆さん都合が悪く一人での参加でしたが、行ってみると4人も知り合いの方が見えて楽しい旅になりました。

テレビの報道で皆さんいろいろご存知でしょうから私の驚いた事を少し書きましょう。

先ず新旧のお宮が隣り合わせにあるのですが、その境の檜の塀が分厚そうで高くて頑丈で流石お伊勢さんという感じで、思わず立ち止まって写真を撮ってきました。塀だけを写真に撮ったのは初めてです。

次はせんぐう館の中に建てられた説明用の実物大のお宮です。その前で係員が細かく長い説明をしてくれました。

旅の楽しみの一つは食事ですが、伊勢での食事は今年オープンした神泉というホテルレストランで、建物も料理ももてなしも気の利いた素晴らしいものでした。

お天気もよく、手配が良かったのか、バス会社が良かったのか、心配した渋滞にも巻き込まれずに予定通り帰ってこられていい旅でした。

お世話してくださった方々お疲れさまでした。ありがとうございました。

伊勢神宮外宮

海の博物館をたずねて

大林ひろ美(220)

伊勢神宮式年遷宮、外宮内宮を参拝し、お神楽を奉納して、少々疲れ気味で海の博物館へ。あたりは薄暗く4時半到着である。

このような場所に壮大な建物が点々と建ち並ぶ。瓦葺き屋根に赤のアクセントの建物。すぐに中に入り、館長から博物館の概要についてうかがう。

海の博物館は、三重県鳥羽市にある財団法人東海水産科学協会が運営する博物館で、漁業に関する道具や器具、民俗資料を収集展示。展示数は5万点余り。国の重要無形文化財も6879点ある。来るものこばまずの精神からだそうだ。移転前は塩害に苦しみ、移転後は外装材に極力金属を用いず、全ての建物が瓦葺きとなり、周辺地域の風景に溶け込んでいる。

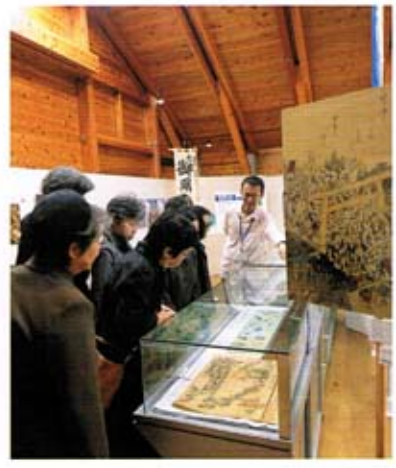
広大な土地に木造の展示棟、自然風景を十分に取り入れゆったりとした庭園が設けられており、入館者はあたたかい博物館を感じてほしい。

建物は安曇野ちひろ美術館を手がけた東大名誉教授内藤廣氏によるもので、建築学会賞を受賞するなど評価が高い。

収蔵庫に移動すると沢山の船が並ぶ。クジラ船、ワラジ丸、ベカ等々。全国いたる所からの船が80隻ほど。ほとんどが人力で動く。入口に海女のたらい船があった。

最後に豊橋市からの貸出展示物がある部屋へ。元々、伊勢神宮と豊橋は、御初祭で縁が深いと聞いている。太一御用と書かれた旗を見て、豊橋吉田湊神明社から、伊良湖渥美半島を経て伊勢神宮へと網を奉納する。

今回は少々忙しい旅ではあったが、天候に恵まれ、神様参拝ということで気分はハイテンション。海の博物館は短い時間になってしまったけれど、もう一度ゆっくりと訪れたいと思っている。



友の会コンサート・尺八と箏のゆうべ

望月志郎(621)

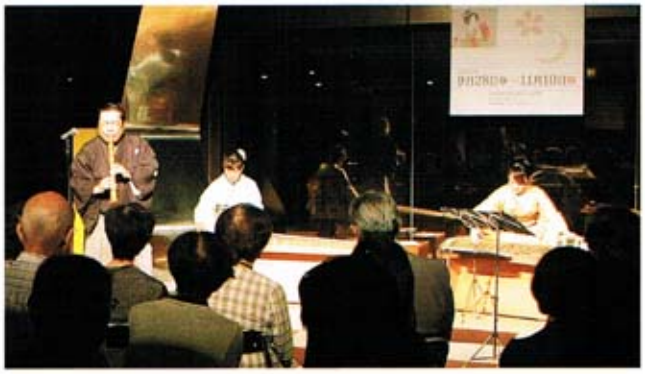
10月13日午後6時から美術博物館のロビーにおいて、標題のコンサートが催されました。岩田恭彦さんの尺八、樽本里美さん、戸田弘子さんの琴、それに友の会理事の藤本逸子さんがピアノで特別参加するという、ちょっと珍しい演奏会でした。

岩田さん、樽本さん、戸田さんは東海地方を中心に活動されているようですが、私は尺八も琴もプロの生演奏を聴くのは生まれて初めてで、御三方の名前も全く知りませんでした。曲目も知っているのは「春の海」だけ。「壱越」という曲を「イチコツ」と読むということも、それが音階のレを意味するということも知りませんでしたが、その他の「リーブ」、「夢ひとつ」、「月しるべ」という曲も含めて、いずれも相当な技量を要求されるものだろうとは、聴いていて思いました。それを何の不安も感じさせずに演奏された御三方は、きっと世界に通用するアーチストだろうと思います。

驚いたのは、春の海を尺八とピアノで演奏されたことで、ピアノでは土用波が寄せる夏の海になるのでは？という私の思いは杞憂に終わり、三河湾の穏やかな春の海が目に浮かぶようでした。逆にアンコール曲ではピアノとサックスではなく、琴と尺八でジャズナンバーが演奏されました。

調弦のための小休止では、岩田さんの指導で初心者が尺八に挑戦！最初はスーッとしか出せなかった人が数分でどよめきが起きるほどの音を出せるようになりました。その間にコップを吹いて自在に音を操る岩田さんの妙技にも感嘆の声が沸き起こりました。

後半はテレビアニメの主題歌が演奏され、来場のお子さんは一緒に歌い、手拍子も起きました。大いに盛り上がった中でのアンコール曲は誰もがご存知の「テイクファイブ」。え？テイクファイブってどんな曲か、ですって？ほら、あのチャッチャッチャーーチャララッチャーってやつですよ、って書いても分かりませんよね。コンサートの報告を書くなんて、だから嫌だと言ったのに・・・。次回のコンサートは皆さん、聴きに来てくださいネ。



土曜サロンを開催します♪
会員ならどなたでも参加いただけます。

日　時／平成25年12月7日(土)午後2時～3時半
場　所／美術博物館　講義室
講　師／後藤清司氏(豊橋市二川宿本陣資料館館長)
演　題／長澤蘆雪の人と作品
定　員／80名程度(当日先着順)　**聴講料**／無料

長澤蘆雪は江戸時代中期の絵師で、宝暦4年(1754)に現在の兵庫県篠山市に藩士の子として生まれ、京都に出て円山派の祖円山応挙の弟子となって画才を発揮し、応門十哲の一人に数えられます。

大胆な構図、クローズアップを使った奇抜で機知に富んだ画風を示し、同時代の曽我蕭白、伊藤若冲らとともに奇想の画家と呼ばれ、近年とくに注目を集めています。美術博物館所蔵《隻履達磨図》、嵩山町正宗寺の旧方丈障壁画(波濤図)など、豊橋ともなじみの深い蘆雪について、その人となりと作品の見どころをわかりやすくお話いただきます。

収蔵品紹介

佐藤 多持●SATO.Tamotsu

[水芭蕉曼陀羅・白68]

昭和58年(1983)　紙本墨画・淡彩　163.0×546.0
平成17年度寄贈

佐藤多持は真言宗の寺に次男として生まれました。母は松林桂月(表紙参照)に師事して南画を描いていたようです。僧籍を継ぐことはなかったものの「仏の光背」とも呼ばれる水芭蕉に主題を絞り、水墨を主体とする抽象的な表現で「水芭蕉曼陀羅」と称する一連の作品を描き続けたのは、そうした出自に縁無きことではないかもしれません。

東京美術学校日本画科を卒業した佐藤は、1948年に友人とともに訪れた尾瀬で水芭蕉の群生を目の当たりにし、以後ライフワークとなる水芭蕉シリーズを手がけるようになりました。水芭蕉の印象を「暁明の頃に見られる水芭蕉は神秘的で思わず合掌したくなります。朝陽には幼児の新鮮なやわ肌を、昼には若い女性のふくよかな肌を、夕べには仏菩薩の慈光を感受します。」と語っています。しかし、その後再び尾瀬を訪れることはなく、ただ一度の邂逅を内なる心象風景としてとどめ、50年にわたって発展させてきました。

1953年に着手した初期の水芭蕉は具象的な描写でしたが、その翌年より抽象化が試みられ、60年代には「水芭蕉曼陀羅」というタイトルが付けられます。やがて「曲線に生命を宿」した心象的な作風へと発展し、六曲屏風など大画面を採用した壮大なスケールの作風を確立するようになりました。屏風に取り組む際には、その特性を理解した上で効果的な表現を用いたようです。

本作品もそうしたヴァリエーションのひとつで、のびやかな弧を描く曲線は「通らなければならない」必然の位置に軌跡を描き、円弧が幾重にも連鎖して平明な中にも深遠な奥行きのある空間を形作っています。水芭蕉の名残は柔らかな白色の円相と、そこに包まれた黄色の珠にとどめられていますが、弧の連なりを離れ、虚空に浮かぶもうひとつの珠は生命の萌芽とその孤独を象徴しているようにも思われます。

水芭蕉を終生追い続け、そこに深遠な宇宙を観想した佐藤多持は、独自の水墨画の境地を築いた作家として知られています。本作品は収蔵品展「墨のいろ」展でご覧いただけます。

(豊橋市美術博物館学芸員　丸地加奈子)

編集後記

長年「風伯」も斜め読み、名ばかり会員の私がなぜか編集委員を仰せつかった。他のメンバーは多士済々、緊張しつつ編集会議に臨んだが、企画展や友の会旅行の感想、個人で出かけた美術展や趣味の話、昨今の社会事象へと話題が広がっていく中、いつのまにか特集記事からページ配分、写真の位置まで決まっていく。時計を見れば、予定の時間内。どうやら、皆さんそれぞれ、名刺の肩書き以上にいろいろな顔をもっているようだ。

ところで、頭から決めつけるわけではないが、思考回路に理系・文系の違いはあると思う。美術鑑賞でも、背景や表現手法まで思いを馳せる方、直観的に感覚でとらえる方。じっくり型とマイペース型。さて、私は……

いやいや、キティちゃんがリボンやヒゲなどの基本をおさえつつ多様な変容を遂げているように、私も、自分を決めつけないで、皆さんの刺激を受けながら変容を目指そう。

(神野志保子)

【表紙作品】
松林桂月《葡萄栗鼠》(部分) 1936 (昭和11)年
収蔵品展「墨のいろ～モノクロームの世界に遊ぶ～」出品作品
＊「没後50年　松林桂月展」11月30日～1月13日
田原市博物館にて開催中

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第87号
編集・発行　豊橋市美術博物館友の会
会　　長　宮田正人
編 集 長　高須博久(副会長)
編集部長　望月志郎
編集委員　鈴木冷子　神野志保子　河邊満江　藤本逸子
清水貴裕
協　　力　豊橋市美術博物館
〒440-0801 豊橋市今橋町3-1　TEL.0532-51-2882
平成25年11月30日発行